

---

# 魔法少女リリカルなのは ~IF~ 古代ベルカの騎士

息抜き

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～I F～ 古代ベルカの騎士

### 【Nコード】

N7037Y

### 【作者名】

息抜き

### 【あらすじ】

10年前、古代ベルカに召喚されてしまった少年は多くの戦いを生き抜き多くのモノを手に入れ失った。

そんなありふれた異世界冒険譚であり騎士物語を終え、青年になった男は地球に帰って行った。

つてな感じお送りする二次創作。

この作品には主人公最強、ハーレムに最初から片足突っ込んでおります。

それらに嫌悪感を抱く方はご注意ください

## プロローグ

とある城の石造りの廊下を一人の男が歩いていた。

床、壁、天井全てが石造りで出来た廊下には十分な照明が設置されておらず、陽が既に沈みかけていて十分な光が差し込まないため薄暗い。

それに加え男の顔は土と煤で汚れているせいでさらに見え辛いものになっていたが、所々で光の当たる場所を歩く時だけ確認することが出来た。

美男子という訳でもなければ、不細工という訳でもなく、気が強そうでもなく、弱そうでもないそんな取り分け特筆するような点もない凡庸な顔だ。

しかしそんな凡庸な顔には擦り傷や切り傷などの真新しい傷が多く走り、その目にはまだ若輩と言って良い歳にしては不釣り合いな気迫が見える事が男の存在が非凡であることを示していた。

その他に、歩き方を見ても隙がなく、口笛でテンポの良い音色を奏でつつも男は周囲への警戒を怠っていない。ある程度の武芸を修めた人間が見れば、この男が平凡を大きく逸脱したレベルの武芸を修めていることに気づくのは容易だ。

男の髪はこの地方では珍しいことに黒く瞳もまた黒い。それに合わせたかのように黒く塗りつぶされた甲冑に身を包み、腰には甲冑同様黒い鞘に収まった黒い柄の西洋剣を下げていた。

見事なまでの黒一辺倒な装備。人が見れば十人に九人は間違いなく不吉と呼ぶだろう、そんな不気味な恰好をした男は暗い廊下をさらに黒く塗りつぶして歩く。

この城の騎士

という訳ではない。男は道が分かれる度に

立ち止まり、どちらに進むか思索するように顔を伏せ、ぶつぶつ呟いた後に道を進んでいく事からそれが分かる。

「襲撃された状況を想定して王座の間への道を複雑にするのは分かるけど、ちよいと複雑過ぎやしないかね？ 思わず一直線にぶち抜きたくなるよ」

口笛に飽きたのか、男は深く溜息を吐き出し、腰にさした剣に触れながら口を開いた。

重々しい外見からは想像出来ない快活で明るい声だが、周囲に応えるものは居らず、廊下に反響してスツと消えていった。

「ああ、分かった分かった。あの化け物と戦う前に無駄な魔力は使わなくて事だろ」

しかし、男は親に叱られた思春期の少年のように投げやりな返事を言うと、柄から手を離し肩を竦めた。

まるで男にしか見えない相手と会話しているように見えるが、魔法技術を知る者が見れば念話で話しているということに気づくはずだ。もっとも口に出す必要はないのだが、それは男の気分なのだろう。話すきつかけが出来たのか、男は今までとは変わりここには居ない話相手に饒舌に話しかけるが、途中で相手の不評を買ったのか、突然大きく溜息を吐き出すとゲンナリした顔で口を閉じた。

男がさらに歩き続けて五分ほど経つと、今までの廊下より一際長い廊下の先に、大きな扉が見えてくる。

数十mの距離があるにも関わらず、ハッキリと見える楕円を二つに切ったような扉は、近づいてみると案の定4mはある巨大なものだった。

「さて、ようやく目的地に到着だ」

男はニヤリと小さく笑うと、つま先でトントンと小さく跳び、小さな掛け声と共に強烈な蹴りを扉に叩きこんだ。

施錠のされていなかった扉はそのまま吹き飛ぶのでは、と思うほどの勢いで開き、石の壁にぶつかり大きな音を立て静止する。

扉の向こうは広大な空間だった。

家10個を丸ごと収納することが出来るほどではないか、と思うほどの広い部屋。天井も広い面積に釣り合いを取るように高く、シヤンデリアが少し見ただけでも20は吊り下がっている。

上から見れば長方形に見えるのだろう。ただ単に男が今通ってきた通路の横幅と高さを広くしただけのような部屋だがその壁はいくつもの彫像や絵画が置かれている。

そして部屋の深部。

男の足元から延びる赤い絨毯が小さな階段を超えた先には玉座が鎮座していた。

金で出来ている以外は宝石等の類は一切使われておらず、壁際に置かれる絢爛な装飾品と比べるとやや地味な印象を受ける。

「貴様には随分と掻き回されたものだ。初め会った時に殺しておく

べきだったか」

その玉座に一人の男が座っていた。

その男が何者であるか、という疑問は浮かぶ余地はない。玉座に座ることの出来るのは王ただ一人しかないのだから。

王は突然の侵入者に対してさも面倒だ。と言わんばかりに玉座に肘をつき、気だるそうな顔を隠そうともせず男を見据える。

「ほら、約束通りここまで来たんだ。ちゃんと相手してくれるんだろ?」

それを気にせずに男は王に向かって、まるで親しい友人と話すかのように語りかけた。

王の口調と態度を見れば分かる通り、この二人に友人と言えるほどの交友関係はない。王の臣下が居れば、『不敬罪だ!』と叫びながら男の首を刎ねるために飛び掛かってくるところだが、幸いにもこの部屋には王と男の二人しかいなかった。そして王も男の口調を気にしないのか咎めるような事はせず、また怒りを押し殺しているようにも見えない。

ただ、ただ面倒そうに男を見つめるだけだ。

「相手をするしかあるまい。ここで私が倒される訳にはいかんのだ」

「倒されたくなかったら降伏するっていうのも良い選択だぜ?お互い怪我しなくて万々歳だ」

「抜かせ。臣下が血を流しているのに私だけが流さぬ訳にはいかぬ  
だろう。それに貴様もそんな結末では納得はしまい 殺気が  
抑えきれしていないぞ」

「あらら、バレテラ」

「ふん、まあいい。それよりも貴様に一つ聞きたいことがある」

おどけて肩を竦める男を見て、王は不快そうに鼻を鳴らすと男に  
一つの質問を投げかけた。

それは男が戦う意義だった。

それに男は答え、今度は王に対して男が質問を投げた。

それは王が戦いを始めた理由だった。

そこからしばらく問答が続く。二人の意見は真っ向から対立しどこ  
までも平行線。

男は人間の尊さを、王は人間は醜さを説く。

男は人間の強さを、王は人間の脆弱さを指摘する

男は王の主張に理解を示し肯定したが、王は男の主張を真っ向から  
否定した。





底を知らさぬような尊大で不敵な笑みを浮かべた王に男は鞘に納まった剣を向け、それに応え王は王座から重い腰を上げる。王は重そうに羽織っていたマントを投げ捨てるように脱ぐと、腰から剣を抜き放った。

金と宝石をちりばめた観賞用の剣　　ではない。実用性のみを重視した燃えるような赤い柄には王家の紋章が掘り込まれているだけ。しかし、実用性を求めたのが伺える柄とは違い、刀身は水晶で出来ているのか、透明だ。

鉄の剣と打ち合えば一合と持たずに粉々に砕けてしまいそうな、そんな儂い印象をその剣からは受けるが、男はその剣を見ると緊張を高め生唾を呑みこむ。

ゆっくりと歩いてくる王に男は剣を両手で持ち直し、正眼に構える。男の剣は血と砂埃で薄汚れてしまっているが、その間から見える刀身は傷一つ無く陰りもない。

「換装しなくて良いのか？貴様の武器はそれだけではあるまい？」  
距離にして10m。王は立ち止まると男にそう問いかけた。

「勿論他のヤツも使わせてもらうさ。ただアンタが相手なら最初はコイツでやり合った方が面白そうだ」

「ほう、” 剣帝” と呼ばれる俺と剣技を競うか。何一つ一流に辿りつけなかった猿真似師が」

「猿真似上等！『技を修得すること、それすなわち模倣なり』ってな。それに、アンタに敗北感を植え付けるにはコレ《剣》が一番だろ？」

「吠えたな小僧。出来るものならやってみよ。しかし、後悔するなよ?」

「しねえよ　　いい加減勝負を始めようか、その座り心地最悪  
そんな椅子は俺達が貰っていく!」

覚悟はできたか” 聖

王”

いつでも来い” 黒騎

士”

男がこの地に召喚されて、気づけば10年の歳月が経っていた。  
長いようで短かった十年間。男は色々な人に出会い、助け、助けら  
れ生きてきた。

男は多くの人に出会った

優しい人に出会った

卑しい人に出会った

美しい人に出会った

醜い人に出会った

美しくも卑しい人に出会った

醜くも優しい人に出会った

男は多くの物を手に入れ、男は多くの物を失った

人では無い種族の友人もたくさん得た

人の形をした獣をたくさん見てきた

良いことも悪いことも辛いことも嬉しいことも悲しいことも楽しいことも逃げ出したいことも飛び入りたいこともたくさんあった

家族兼戦友と出会えた、民のために涙を流せる心優しい姫にも出会えた、それに仕える仏頂面の騎士にも出会えた

召喚当初少年だった男は、何故こんな地に連れてこられたのだと散々嘆き喚いたものだったが、今ならこの地に召喚されて良かったと、心の底から胸を張ることが出来た。

これは既に終わってしまった物語

故に詳細は語られることはない

異界から召喚された凡庸な少年は多くの死と生に触れ成長し、王を倒すまでになり、戦いが終わると男は元の世界に帰り、ようやく平穏を手に入れた。

それだけの事。

たったそれだけの、ありふれた騎士物語であり異世界冒険譚はここに幕を下ろした。

そして一つの物語の終焉は新たな物語の誕生を示す

魔法少女リリカルなのは ～E.F～ 古代ベルカの騎士 はじまり  
ます

## プロローグ（後書き）

むかし むかしの そのまたむかし  
ベルカがその地にあったころ

二人の聖王剣を抜き

多くの人々血を流し

多くの人々涙を流し

多くの人々朽ち果てた

そこに現れた二人の主従が5人の騎士を引き連れて

ベルカに平和をもたらした

めでたし めでたし

## 第一話

柊翼の朝は早い。

五月に入り徐々に昼の時間が増えてきているとはいえ、早朝の五時ともなると流石にまだ陽は昇りきっておらず空は青黒い。

そんな時間に翼は、誰に起こされる訳でもなく起床する。ベッドの上で猫のように体を伸ばし終えた翼は、枕元に用意しておいたジャージに袖を通し隣の部屋で眠る両親を起こさぬように静かに家を出た。

庭でラジオ体操と柔軟体操をし、十分に体を解した後は海に見える海沿いの道を高台に向かつて一定のペースで走り体を温める。

海の方から流れてくる風はやや強く冷たいものだが、徐々に火照ってくる体には丁度良く、翼は気持ちよさそうにペースを上げていった。

家から走り続けて20分ほど経つと、目的地である高台の公園にたどり着いた。入口付近で走るのをやめ、息を整えながら翼は持参したタオルで汗を拭き公園に置いてある水道で水分を補給をする。

その後、丁度いいタイミングで海から顔を出した太陽に向かつて手を合わせ自分の住む町に挨拶をすると、なるべく汚れの少ないコンクリートに座禅を組んで目を閉じた。

息を浅く吸っては深く吐き、逆に深く吸っては浅く吐くことを繰り返す。

翼が利用しているこの公園は高台に位置し、住宅街からも離れている自然公園のような場所だ。海の見晴らしは大変いいのだが立地が悪いせいで、昼間ならまだしも陽が昇ったばかりの時間帯では人影



は全くない。

「瞑想をする時は出来れば自然が肌で感じられる静かな場所でやれ」という教えを受けた翼にとって、ここは理想の場所だ。

10分間の絵に描いたような瞑想を終え、翼は最後に深く息を吐き出しゆっくりと目を開けると、尻に付着した砂を叩き落としながら立ち上がる。

次に翼は上に着ていたジャージを脱ぎTシャツ一枚になると、公園の大部分を占めている広場に移動し、左足を前に出した状態で足を肩幅に開き、両腕を突き出した状態で脱力した。

男子なら一度はしたことはあるだろう、所謂ファイティングポーズだ。翼は深く息を吐き肺の中を空にし、少し息を止め今度は浅く吸い込む。

脱力した際に自然と細めていた目が、開かれると同時に、翼は鋭い突きを何も無い空間に放つ。そしてそのまま勢いを殺さずに流れるような回し蹴から連携して出された地面を這うような足払いが砂を巻き上げた。

ボクシングのシャドウに近い練習方法だ。しかし、本来シャドウは型の確認のために行われるものだが、翼の動きに迷いはない。

鋭い突きが空気を切り裂き、蹴りが風を生む。敵の攻撃も想定し、時に防御し、時に避ける。仮想敵が複数の場合は翼は一定の位置に立ち止まることはせず、常に走り回り様々な方向に技を次々に繰り出す。

演武にしては些か無骨で華やかさが足りない。かといって実戦向けの格闘技評論家にしては翼の動きは一つ一つが派手すぎた。

「格闘技評論家が見れば間違いなく、無駄が多すぎる。実戦向きではない」と酷評しそうな動きを続ける翼からは激しい動きに見合った

大量の汗が吹き出し、打ち水のように地面を濡らす。既に息は完全に上がっているが動きは一向に衰える事を知らず、衰えるどころか逆に徐々にだが動きが早くなっていくように見える。

かれこれ20分。

腕からつま先まで、体すべての筋肉を使った翼は最後に前方宙返り踵落としという、もはやダンスの領域と言っていいアクロバティックな技を最後に動きを止めた。

フルマラソン完走を果たしたランナーのように激しく呼吸をする翼はその場に座り込むことはせず、背筋を伸ばして空を見ながら息を整える。

息を整え終わった翼はTシャツを脱ぎ、雑巾のように丸めて絞ると水に漬けたのでは、と思うほど勢いよく汗が絞りだされる。

Tシャツを水道でジャバジャバと洗い、ズボンが濡れないように頭を下にし背中から水を被ると急激に体が冷やされたことで少し呼吸が苦しくなるが、それでも翼は気持ちよさそうに低い声をあげた。

簡易シャワーを堪能した翼は、髪の毛を乱暴に掻き水気を飛ばしながらタオルで上半身を拭く。

びしょ濡れになったTシャツは腰部分に巻き付け、裸の上半身にはそのままジャージを着る。固い繊維と金属製のチャックが肌をチクチクを刺激するが、湿った服を着るよりかは何倍もマシだ。

準備が終わったとばかりに大きく伸びをすると、翼は自宅へ向かって走り出した。

公園に行くときは体を温めるためにペースを抑えたが、帰りはその必要がないため来る時の倍近くのペースで走る。結果、翼は行く時は20分かかった道のりをわずか13分に短縮することに成功した。

翼は家の門を出るときと同様静かに潜り、玄関へと向かうとドアの横に立てかけられた1mほどの細長い袋を手にする。これは翼が家を出る際にあらかじめ置いておいたものだ。

それを片手に持ち庭に移動すると、袋の口を縛っていた紐をほどき中身を取り出す。

出てきたのは一本の竹刀。この竹刀は最近購入したもので、素振り以外に使われていないため刀身部分である竹は傷一つない綺麗なものだが、それとは逆に柄部分は翼の垢と血で赤黒く薄汚れていた。そんな新旧アンバランスな竹刀を手に持ち、翼は早速素振りを始める。

これも公園でやった無手の鍛錬のように仮想敵を相手にするものだが、無手の時とは違い翼は足で地面に張り付くように重心を下げる。

上段に構えていた竹刀を鋭い踏み込みと共に振り下ろす。わずか2m離れた仮想敵を一瞬で切り捨てた翼は、背後から斬りかかってくる仮想敵の剣を左足を半歩引くだけで躲し、すれ違うように首を刎ねる。

その次に来るのは左右からの挟撃。翼の胸を鋏で切るように二本の剣が迫るが、それを独楽のように回りながらしゃがんで避けると、そのまま回転の勢いを剣に乗せ二人の足を両断した。

無手の時の動きが速さに重点を置いた動きだとすれば、剣を扱っている今の動きは技に重点を置いた動きとでも言うべきか。

無手の時ほどの素早さを見る影もないが、一撃一撃を必殺とした剣技は無手の時とは別の脅威を感じさせる。

袈裟切りで最後の仮想敵を倒し終えた翼は呼吸を整え竹刀を袋にしまい、二時間ぶりの我が家に入る。

玄関を開けると母親が作った料理の良い匂いが漂い翼の鼻孔を刺激する。「ただいまー」と声を上げながら扉を開けると、翼はまず浴室に向かった。  
汗で張り付いたズボンと下着を少し手こずった末に脱いで脱衣籠に放り込む。

着替えは既に翼の母親が用意してくれたようで、着替え用のかごに綺麗に畳まれて入っていた。

汗を流すだけなのでそれほど時間はかからず、5分もしない内に入浴を終わらせ、手早く着替えを済ませると両親が待つリビングに翼は向かう。

既に両親は朝食を摂っていた。

昨晚の野菜炒めの残りに、今朝焼いたばかりのアジ。その横には小さく盛り付けられた漬物。日本らしい食欲をそそる朝食に、もう辛抱たまらん！と翼の腹が大きく鳴る。

「おはよう」

「……おはよう」

「……ああ、おはよう」

翼からの挨拶に対して少しの間を経て両親が返事を返す。家族の朝の挨拶としては寂しいものを感じる。

翼はそれを気にせず自分の席に向かうが、ぎこちない返事をした当人である両親は息子を難しい顔で見ると、互いに顔を見合わせて溜息を吐いた。

翼に対してちゃんと挨拶を返す事から險悪という訳ではないことが分かる。どちらかという気難しい時期の子供に対してどう接したら分からない、といった感じだ。

相変わらず気にする素振りを一切みせず翼はテーブルの上に用意された二つの茶碗にご飯とみそ汁を盛り席に着くと、「いただきます」と両手を合わせた。

昨晚摂ったカロリーなんてものは朝の運動で全て消費してしまった翼は一心不乱に朝食を口の中に掻きこむ。

精一杯何でもないように振る舞いながらぎこちなくも会話をする翼の両親であったが、家族で食べる朝食としては些かぎこちないものだ。

(まあ、仕方がないか)

1分と経たずに茶碗に入った米を大根の漬物一枚だけで全て食べ、おかわりを求めて席を立ち炊飯器に向かった翼は両親には気づかれないように静かに一人ごちた。

翼には何故両親がこんなに気まずい雰囲気を出しているのか見当がついている。

いや、見当ではなく確信しているといっても良い。というよりは、この場合は翼自身が気づかないといつまでたってもこの空気は改善されない。

なにせこの空気の原因は全て翼にあるのだから。

さて、ここで一つ仮定の話をする。

今自分に息子が一人居るとしよう。その息子は自分と妻、もしくは自分と夫よりも早く起床し一時間ランニングをし、自分たちが起床するくらいの時間になると庭先で一人黙々と竹刀を振るっている。

さて、これだけ見れば別に問題は何もないだろう。むしろ親としては日々精進を重ねている息子は誇るべきものだし、親の鼻屑目に見ても翼の動きは高度なもので将来に期待できる。

しかし、もしこれらの事を9歳児がやっていたらどうだろうか？

9歳児。

まだ130cm程度しかない子供が片道6kmある公園までの坂道を軽くペースで走って20分で走破し

公園では体操選手並みの動きでいつの間にもやら修めていた武術の鍛錬をし

帰りはマラソン選手並みのペースで走り、庭では面だけで剣道の全国大会を制覇出来るのではないかと思うほど鋭い剣捌きを披露しているのだ

ぶっちゃけ言おう。

凄いとかなんだとか思う前にドン引きである。

これでも柘夫妻の反応はかなりマシなものだ。もしも欲に溺れてしまつていれば翼を使って金儲けを企んだかもしれないし、逆に不気味がつて親としての役目を放棄する可能性だつてあつた。

それに対して柘夫妻は今距離を取っているものの、ちゃんと翼に愛情を注いでいる上、息子が人外一步手前のスペックを披露した直後でなかつたら普通に会話もする。

先ほどから気にしてないように食事を摂っている翼だが、一応気にはしているし頭を何度も悩ませている。

でも仕方がないのだ。

時間がある日に朝鍛錬をするというのは翼が師匠から言いつけられた、破ることの出来ない鉄の掟であるし、既に習慣になつている翼にとつてもしない事には一日が始まつた気がせず落ち着かない。

かといつて両親と気まずい空気になる原因となつている辺り何の憂いもなく続けるのは難しい。

特別優秀ではない翼の頭では一月も悩んでるのにも関わらず解決方法の一つも思い浮かばないでいた。

(ま、取りあえず学校に行つて考えるか)

そろそろ登校しなければいけない時間だ、と自分の中で言い訳を考えた翼は考えることを中断する。  
単なる問題の先送りということを自覚しつつも、母親に対して美味しかったと声をかけた翼は食器を流しに置き、教科書やらが入ったバッグを片手に逃げるように家を出た。

柊翼 9歳児

職業 小学三年生兼騎士

かつて異世界で聖王を倒した英雄は今日も頭を悩ませながら登校する。



## 第一話（後書き）

あとがき

どうも初めましての方は初めまして、息抜きと申すものでございやす。

前回のプロローグでは書かなかったので今回が初あとがきになります。

あらすじにも書いた通り、このSSでは最初から主人公最強要素およびハーレムに片足突っ込んだところから始まっております。それらに嫌悪感を覚える方には推奨できません。

と堅苦しい挨拶はこのへんで終了。

皆さんこんなどっかで見たような何番煎じかも分からない小説を読んでくれてありがとうございます。

自分としては

『あ、こういう設定なくね？』

と思って書き始めた話なのですが・・・まあ間違いなく誰かと被ってるでしょうね。

まあその辺は気にしたらキリがないので気にしない方向でいきたいと思えます。

矛盾点、改善点、罵詈雑言などがあつたら感想に書いてくださると嬉しいです。それが批判であつても作者の力になることは間違いありません。

ただ、作者のメンタルは豆腐なので出来れば柔らかい表現をお願いします。

半年くらい前に書いたまじこいの小説は全く書けなくなってしまったので気分転換に書いたはいいものの相変わらずの失踪っぷり  
他にもISとか東方とか禁書とか色々プロット完成してるのがあるけど全部いっぺんに書いたら失踪確定なので我慢中だったり。

## 登場人物

柊 翼 (ひいらぎ つばさ) 9歳 精神年齢19歳

翼の主観で10年前に古代ベルカに召喚魔法によって召喚された少年。召喚主とその仲間たちに数年間鍛えられ、生き抜く術と戦う術を学ぶ。

18歳の時に二人の聖王後継者候補が起こした戦争に仲間と共に身を投じ、敵対した側の聖王を撃破するという偉業を成し遂げた。その後とある理由で現代の日本に帰ってきたが、何故か召喚された当時から全く時間が経過しておらず、翼の体も9歳のままだった。

私立聖翔学園小等部に在籍。

趣味はゲーム、ネット。

好きなもの(大切なもの) ベルカ時代に共に戦った戦友兼師匠兼家族。師匠たちに教わった技。

嫌いなもの(苦手なもの) 政治的な駆け引き。師匠たちの修行。身長の高いヤツ。極端な思想(善悪は問わない、極端な思想に善悪は余り無いというのが翼の考え)

好きな女性のタイプは自分より背の低い大人しい子。

戦闘スタイル ????

デバイス ????

得意レンジ ????

F A T E 風ステータス表

敏捷	幸運	耐久	魔力	筋力
?	?	?	?	?
?	?	?	?	?
?	?	?	?	?

## 登場人物（後書き）

第一話時点なので情報が少ないのにはご理解をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7037y/>

---

魔法少女リリカルなのは ~IF~ 古代ベルカの騎士

2011年11月21日23時47分発行